

新購入主要文献解題

山本実彦旧蔵・川内まごころ文学館所蔵

「改造」直筆原稿の研究

付録・DVD版「改造」直筆原稿 画像データベース

紅野敏郎・日高昭二編

雄松堂出版 2007年10月

1999年に、改造社の創業者・山本実彦の遺族が、「改造」関係の直筆原稿約7千枚（90名の作家・文学者・思想家の236点にわたる作品など）を、実彦の出身地である鹿児島県の薩摩川内市に寄贈した。寄贈を受けた川内まごころ文学館は、「収蔵資料展」を開催するとともに、展覧会の監修者であった早稲田大学名誉教授・紅野敏郎氏のもとで直筆原稿の研究プロジェクトを立ち上げた。本書は、その成果として刊行されたものである。その内容は、改造社の出版活動と、直筆原稿の改題およびその原稿にかかわる研究論文からなる。

また、付録としてDVD版も同時に刊行されている。発見された直筆原稿のデジタル画像と、それらの発表誌における活字媒体が比較対照される仕組みになっている。これほど多量・多彩な原稿をみる機会はおそらく今後ないものと思われるが、筆記された個性的な字体、および削除・加筆の具体から、どういう情報を読み取ることができるか。西洋では、すでに生成研究として知られているとはいえ、日本ではまだまだ未開拓の分野である。「文学・思想研究」における新しい方法論の試みが、ここからはじまるともいえよう。

（日高昭二）

新購入主要文献解題

1. 『新色名事典』
2. (財)日本色彩研究所編
3. 日本色研事業株式会社
4. 2002年9月(第5版)
5. 日本色彩研究所が開発したPCCS(日本色研配色体系)の中から、PCCS系統色名区分にしたがって配列した色見本帳である。系統色名のは数は432あり、それぞれ色票が貼付してある。各系統色名の範疇に入る代表的な固有色名または基本色名が、主に和、中、英、仏、独、伊語の中から取り上げられている。その数は約1400語に上る。残念ながら、固有色名または基本色名の1つ1つには色票がついていないが、その命名の元となった動植物のイラストが描かれていたり、またその色名のいわれやそれに関する短い歴史の記述があり、「物語」としても楽しいものである。

ちなみに「新橋色」を見てみると、PCCS系統色名では「明るい緑みの青」であり、「明治中期に、化学染料が用いられるようになって、着物にあざやかな青緑色が使われるようになり、当時花柳界の新興勢力であった新橋の芸者衆が好んだ色として、一般にもその色が流行したので、新橋色という色名が生まれたといわれている。新橋の芸者屋が金春新道にあったところから「金春色」とも言われた」とある。

筆者が今一番興味を持っている「緑」(PCCS系統色名で「鮮やかな緑」)についてはこうある。「たいていの言語で、緑は最後に原色の仲間入りをした基本色彩語であったと考えられている。日本語のみどりは、瑞々(みずみず)しいということ、おそらく草木の新芽と関係があると考えられている。やはり多くの言語で青と緑は意味の範疇において未分化であり、二つの独立した色彩語が成立しても、日本語や中国語では緑に色づくことが青いと形容される習慣が続いた。万葉集には緑が使われた歌が2首あり、延喜式では緑も青緑も記載されているが、襲の色目をはじめ、当時から青と記されている色はたいがい緑か青緑を表している可能性が高い。英語のグリーンも成長するグロウ(Grow)あるいは草のグラス(Grass)と関係づけられて、植物の生成現象を概念の基礎としていたと考えられている。」

(三星宗雄)

辛亥革命史資料新編（全8巻）

国家清史編纂委員会

湖北長江出版集団・湖北人民出版社 2006年刊

1911年10月に勃発した清朝打倒の辛亥革命について、それを準備する過程から革命が起こった後の状況に至るまでの重要資料を編集した資料集として、かつて『辛亥革命』全8巻（中国近代史資料叢刊の1種、1957年刊）が出版されたが、今回出されたのは、編者の序言によればその続集ではなくて、先の『辛亥革命』の欠点を補うべく資料の選択に極力主観性を排し、また1つ1つの資料の全貌を留めるようにつとめ、さらにはこの間に収集した多くの資料を取り入れたものだという。なお、8巻の配列は資料の内容やその来源によって、1巻は「時人文集」、2巻は人物年譜、伝記、日記、3巻は遼寧省档案、4巻は浙江、江蘇、吉林、雲南4省档案、5巻はシンガポールの新聞『中興日報』、『南洋総匯新報』の関連資料、6巻は日本外務省档案、7巻はフランス外交部、陸軍部档案、8巻はイギリス外交部档案で、外文資料は全て中訳されている。

『辛亥革命』を利用して研究を始めた者としては、より充実した資料集を手にすることができたのはまことにうれしいことである。

（大里浩秋）